

## G・レーマン『聖ジュリアン伝』

大橋, 絵理

<https://doi.org/10.15017/8774>

---

出版情報 : Stella. 21, pp.177-180, 2002-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

## G・レーマン『聖ジュリアン伝』

大橋 絵理

本書は、フローベール『三つの物語』のなかの2番目のコント『聖ジュリアン伝』をあつかった、分量にして200頁ほどの研究書である<sup>1)</sup>。著者のジェラルド・レーマンはデンマークのオーゼンセ大学助教授で、おもにユング的アプローチによる「<sup>イマジネール</sup>想像的なもの」についての研究者であり、本書にも「フローベールの想像世界にかんする考察」という副題をつけている。『三つの物語』は全体がプレイアド版にして87頁と短い作品であり、『聖ジュリアン伝』はそのうちでも25頁を占めるにすぎない<sup>2)</sup>。このように小品であるがゆえか、単独でこれを論じた研究書としては本書が嚆矢をなす。

本書の特徴に触れるに先立ち、『聖ジュリアン伝』を扱った論文や著作をいくつかふりかえておこう。フローベール研究の第一人者であるレイモンド・ドゥブレ＝ジュネットは論文「聖ジュリアン——単純形式、学知形式」で、伝説や、サルトル的精神分析、古代モデルとキリスト教的モデルの統一といういくつかの視点から『聖ジュリアン伝』を検証している。ほかには、ミカエル・イサシャロフが『『三つの物語』と非線形問題』という論文で作品集全体に共通する「予言的言葉」「火」「視線」「空間」の4要素の象徴性と、それらによって構成される水平と垂直という二元性について分析している。また忘れてはならないのはジャン・ベルマン＝ノエルの『ギュスターヴ・フローベールの4番目のコント』であろう<sup>3)</sup>。ベルマン＝ノエルはフロイト的精神分析の観点から、『ヘロディアス』は「口唇期」、『純な心』は「肛門期」、『聖ジュリアン伝』は「性器期」であると断定する。だが、これら従来の研究は主として『聖ジュリアン伝』を『三つの物語』の一連のコントのひとつとして定義づけており、特にベルマン＝ノエルに見られるように、全体の連鎖を重視するあまり強引な解釈に陥りがちな側面をもっていた。

それに反してレーマンはあえて『聖ジュリアン伝』のみに焦点を絞りを、他の

コントとの関係について言及しようとはしない。3つのコントの共通点あるいは連鎖性よりも「聖人伝」という特異性に着目し、そこに重要性を見出し『聖ジュリアン伝』を3つの視点から分析するのである。彼は、まず英雄神話的側面、次に通過儀礼を伴った聖的側面、最後に主人公の人物像を論じることによって、フローベールのジュリアンの特性を定義づけることに成功している。では、これらの3つの視点とはどのようなものかを具体的に見ることにしよう。

英雄神話はおもに共通の基本概念、すなわち「潜在化」「劇的行為」「神化」の連鎖によって構成されており、その3段階がまさに『聖ジュリアン伝』のなかに見出される、とレーマンは主張する。「潜在化」とは英雄の誕生の秘密のことであり、英雄は必ず予言のもとに生まれることになっている。じっさい第1章に記されているように、ジュリアンは皇帝の家族あるいは聖人になるという二重の予言のもとに生まれている。次の「劇的行為」の過程では英雄は世界中を旅し、敵と戦い、子供時代の依存性から脱却し、隠されていた優れた能力を世間に示す。じじつ第2章では、描写は叙事詩的になり、ジュリアンは両親の城を出て正義の騎士として様々な国の敵や怪物を倒し、異教徒から皇帝を救い出し、その娘を娶り幸福な結婚生活を送るのである。最後の「神化」の段階に至るためには、外敵ではなく内面の敵が重要となる。英雄は自己の内に悪魔的要素を隠しもっており、その敵と戦うことによるのみ神化されるのだ。まさにジュリアンも第3章で両親殺害の罪の償いのために、隠者として生きる道を選び、非難を甘んじて受け苦難に打ち勝ち、真の英雄となる。このような相似から『聖ジュリアン伝』が英雄神話という側面を色濃くもつことは明白だ、とレーマンは考える。

しかし同時にレーマンは、このコントは単なる英雄神話の形式に留まるものではないと主張する。彼によれば、複雑に織り込まれた通過儀礼をとおして見られる聖性の介入こそがフローベールの想像的世界を特徴づけているのだ。すなわち2度の狩りがそれぞれ異なった意味をもつ通過儀礼の場になっているのである。まず第1の狩りは、礼拝堂の祭壇の下の白い鼠や、精霊の化身と思われる鳩を殺すという出来事から、ジュリアンの聖的意識の墮落、野獣性を象徴していると考えられる。だがそれは狩りの最中に投げつけられる雄鹿の呪いの言葉の超越的な力によって転換され、ジュリアンを「野獣」から人間社会

や愛へと導くことになる。つまり鹿は潜在的な虐殺の快樂への衝動を意識にのぼらせるという聖的媒介者の役割を果たしているのである。いっぽう第2の狩りでは、第1の狩りとは反対にジュリアンは動物に翻弄され、これを殺すことから免れるかわりに、己の両親を殺害してしまう。だがここでも両親の血がキリスト像まで広がるという描写によって聖性の介入が明らかになる。この出来事が原因でジュリアンは今度は人間社会から離れ、孤独・内省・絶望・苦悩という通過儀礼の過程を進む。そして最終的にレプラと出会い、彼を全面的に受け入れ昇天することによって、すべてを超越した世界へと到達する。このように2段階の通過儀礼によって彼は有限から無限の聖的空間へ移行するが、この到達した空間の永遠性こそがフローベールの熱望した「何についても書かれていない書物」の自律した創造空間と一致することになるのである。

最後にレーマンはユング的手法によってフローベールのジュリアンの人物像の分析を試みる。まずジュリアンの両親は表面的には完璧で幸福な夫婦の象徴のように描かれているが、厳密に見ると、彼らは完全に対照的で相容れないことがわかる。父親は行動的で戦闘を好む世俗的な存在であり、母親は受動的で平和を愛する聖的な存在である。それゆえ、息子が皇帝の家族になるという父への予言、聖人になるという母への予言のいずれもが、じつは両親の潜在的欲望そのものと見なせるのだ。その結果ジュリアンは2つの対立する性質を自己の内に隠蔽し、それらの葛藤によって精神的に引き裂かれ翻弄され続けるのである。レーマンは『聖ジュリアン伝』は相反する2つの要素、「父親 = 世俗性 = 太陽」的なものと「母親 = 聖性 = 月」的なものとの絶えまない往復運動によって成立していると言う。つまりコントの前半部分では、苦悩しつつも現世的に価値のある皇帝の家族になるという事実から、ジュリアンはむしろ太陽的な主人公であったことが示唆されている。だが後半では、分裂の原因であった親の殺害を契機として、自己の内面性を再発見し聖者への道を歩むことにより月の主人公へと変貌を遂げるのである。これはジュリアンがレプラを小屋に招き入れ共に昇天する時が夜だったことにも暗示されている。そして最終的にはレプラ = キリストとともに「真つ青な空間」へと到達することによって、ジュリアンは月的要素のなかに太陽的要素を取り込み自らの内で統合し、欠けることのない聖なる存在となるのであるが、それこそがフローベールの聖人の特徴である、そうレーマンは結論づけている。

以上のように『聖ジュリアン伝』の聖性や人物にかんする注目すべき分析のいっぽうでは、記述内容の重複や、その重複がゆえの論理的な曖昧さも否定できない。また、想像力批評やユング的元型に重要性を置くところから還元主義的な限界を感じさせることも事実である。さらには作品の創作過程を十分に考慮していない点も弱点のひとつといえよう。とはいいいながら『聖ジュリアン伝』を多角的に論じた本書は、『聖アントワヌの誘惑』や『ヘロディアス』などフローベールの他の「聖人もの」に新たな光をあてる手がかりとしても貴重な貢献であることは明らかであろう。

## 註

- 1) Gérard LEHMANN, *La Légende de Saint Julien l'Hospitalier. Essai sur l'imaginaire flaubertien*, Odense: Odense University Press, 1999, 200 pp.
- 2) Gustave FLAUBERT, *Œuvres*, t. II. Édition établie et annotée par Albert THIBAUDET et René DUMESNIL. Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1952.
- 3) Raymonde DEBRAY-GENETTE, «*Saint Julien*: forme simple, forme savante», in *Métamorphoses du récit. Autour de Flaubert*, Paris: Éd. du Seuil, 1988, pp. 131-149; Michael ISSACHAROFF, «Trois contes et le problème de la non-linéarité», *Littérature*, n° 15, octobre 1974, pp. 27-40; Jean BELLEMIN-NOËL, *Le quatrième conte de Gustave Flaubert*, Paris: Presses Universitaires de France, 1990, 126 pp.